



プラス

にかつみ  
仁箇堤

# うわせきがた 上堰潟 ガイドブック



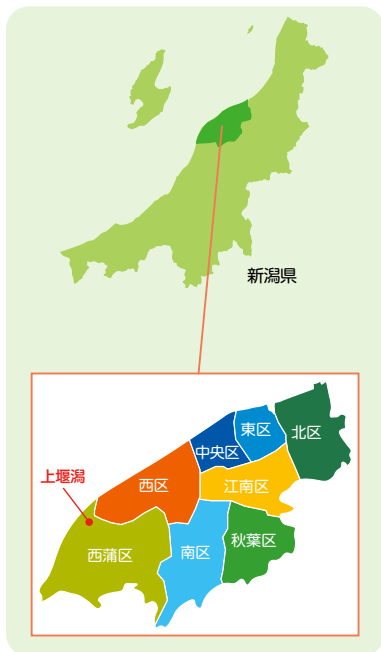
## 目次

- ◆上堰潟公園周辺案内図…………… 1
- ◆上堰潟・仁箇堤とその周辺の地形…………… 3
- ◆上堰潟の今昔―土地改良事業以前と以後―…………… 7
- ◆上堰潟低地とつながる角田山…………… 10
- ◆上堰潟で暮らす生きものたち…………… 11
- ◆上堰潟と周辺の鳥類…………… 12
- ◆上堰潟と周辺河川の水生動物…………… 13
- ◆上堰潟の水辺と農地の動物…………… 14
- ◆上堰潟周辺の街道と史跡…………… 15
- ◆上堰潟のはなし…………… 17



# 上堰瀉公園周辺案内図

## アクセス略図



### 【バスをご利用の場合】

新潟交通「巻－間手橋－角田（妙）線」  
最寄りバス停「布目（ぬのめ）」、公園入口まで約 600 m  
※観光周遊バスが期間限定で運行します

### 【車をご利用の場合】

- 北陸自動車道巻瀉東 IC から一般国道 460 号経約 20 分
- 新潟市街地方面から一般国道 116 号明田（みょうでん）交差点から県道 46 号経約 15 分
- 一般国道 402 号シーサイドラインから角田浜地区三差路経約 10 分

## ■ 上堰瀉公園の概要

所在地：新潟市西蒲区松野尾 1 番地  
公園面積：26.3ha

## ■ 上堰瀉

水面面積：約 11ha

水面標高\*：+ 3.5 m

\*標高は東京湾標準水位を基準とする

### 人造湖

かつては、灌漑用水源、大雨時の調整池として利用されていました。しかし、1960 年前後に始まった土地改良事業によって用排水路の整備が進み、瀉に流れ込む水が減少しました。そのため瀉は干上がり長期にわたって乾陸化した状態となりました。その後、1993 年から 4～5 年計画で進められた治水対策および河川公園整備事業によって、上堰瀉は西山川の氾濫を防ぐための洪水調整としての機能をもつ人工的な瀉として復元されるとともに、自然対応型の公園として整備されました。

### ！ 洪水調整堰

大雨により川の水が増えると堰が倒れて、瀉に流れ込みますのでご注意ください。



上堰瀉公園には 1100 本を超える桜を含む落葉広葉樹、42 本の常緑広葉樹、4 本の針葉樹が植樹されています。常緑広葉樹と針葉樹の位置は本ガイドブックの作成にあたって確認したものです。



布目の夫婦桜

## ■ 仁箇堤

**所在地** : 新潟市西蒲区仁箇

**水面面積** : 約 5.6ha

**水面標高\*** : +9.2 m

※標高は東京湾標準水位を基準とする

ため池。丘陵の谷口付近に堤防を築いて造られた貯水池。



灌漑用水源、防火用水として江戸時代に貯水され、現在も灌漑用水として利用されています。1980年代に上堰瀉が乾陸化していたため、この周辺地域では唯一の水辺でした。そのため、1987年から3か年計画で東屋や遊歩道の設置といった環境整備が行われました（現在、東屋は撤去され遊歩道も廃道となっています）。なお、1994年から1996年にかけて堰堤が改修されました。



菜の花とサクラ

園内では春には菜の花とサクラ、夏にはヒマワリ、秋にはコスモスなど四季折々の花を楽しめます。



ヒマワリ



コスモス



わらアート

秋に稲わらを活用したアート作品を制作・展示



このはなさくやひめ  
木花開耶姫



公園内の広場と水路

※芝生広場は、上流河川が増水したときには、洪水調整のため、一時水没します。



上堰瀉公園休憩所



- 駐車場
  - トイレ
  - 東屋
- 凡例

# 上堰瀧・仁箇堤とその周辺の地形

【澤口晋一】

## ■ 地形的にみた上堰瀧の位置

上堰瀧は、北に浜堤（列）、西に角田山、南に峰岡丘陵といったそれぞれ性格の異なる地形に囲まれた低地帯（以下、上堰瀧低地）の中に位置します（図1）。

このうち浜堤は、砂からなる線状の高まりで、暴浪時の波の到達点付近に形成される地形です。浜堤は過去の海岸線の位置を示します。上堰瀧低地には、縄文時代前期の高海面期からそれ以降に形成された浜堤が10列以上にわたって東西方向に等間隔に並列しています（図1）。

浜堤は内陸に位置するものほど形成された時代が古く、布目の集落がのる最古の浜堤①（写真1）からは縄文前期初頭（約7,000年前）の土器が出土しています。こ

の浜堤①が形成された後、海岸線は次第に退いていきました。②以降の浜堤はその途上に形成されていったものです。

一方、浜堤と浜堤に挟まれた部分は、細長い凹地となっています。この凹地は堤間地（堤間湿地、堤間凹地ともいう）と呼ばれ、多くは湿地となっていますが、湛水して小規模な水域となっている所も数カ所認めら



写真1 布目の浜堤

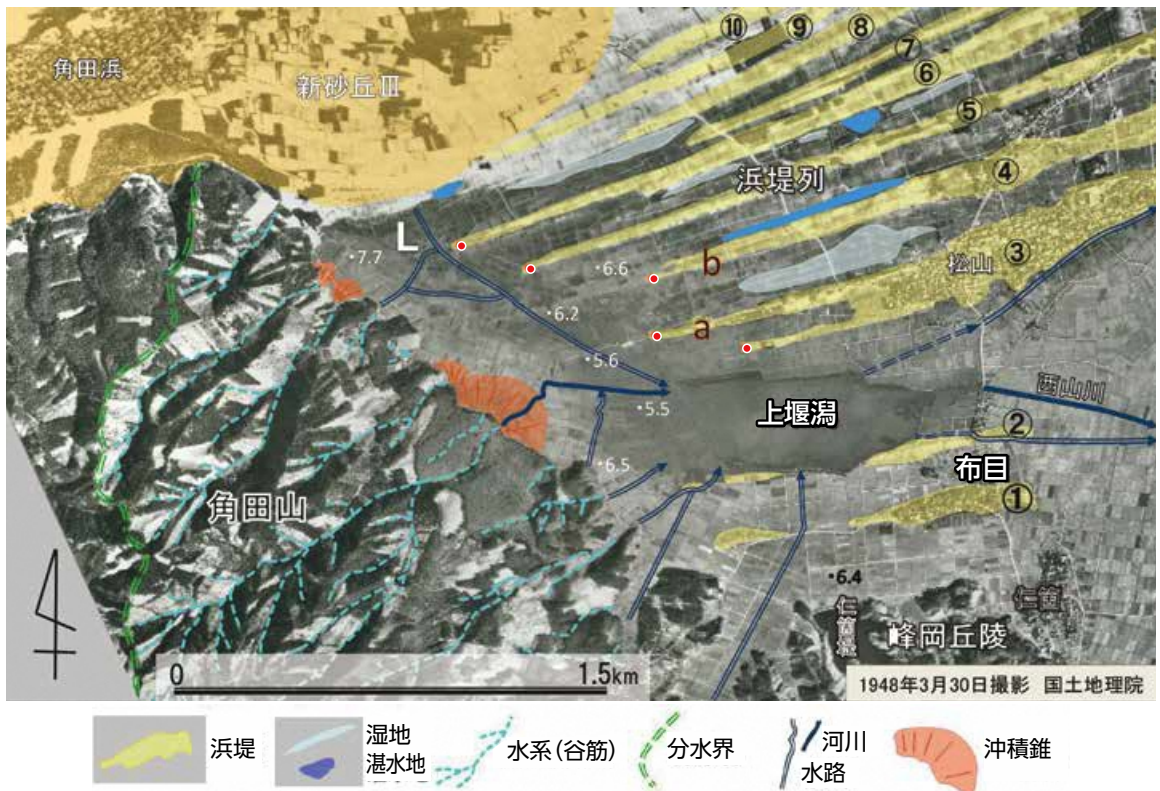


図1 上堰瀧低地の地形

れます。

浜堤の西側先端部は赤い丸印の所でも消失し、ここから角田山の山麓線まで幅 300～400m ほどの船底状の低湿地となって、②（布目）と③（松山）の浜堤の間の広い堤間地に続きます。この堤間地に現れた大きな湛水域が上堰潟です。ここが湛水するのは、図 1 に示した地点 L から上堰潟に向かって 2m ほど地盤高が低くなっているためです。上堰潟は、成因的には鳥屋野潟と同じ堤間湖とみなされます。

なお、現在では浜堤列中の凹凸は平坦化されて畑地となっており（写真 2）、両者の地形の識別はやや難しくなっています。



a、b は、図 1 の浜堤に示した a、b に対応します。浜堤 a は高まりが保存されていますが、浜堤 b は高まりが削り取られており、現地でも識別が難しくなっています。

写真 2 平坦化された浜堤

## ■ 水はどこからきたのか

上堰潟の水はどこからきていたのでしょうか。いうまでもなく角田山です。図 1 をみると、角田山東面には何本もの谷（水系）が発達していることがわかります。そこには現在でも年中枯れることなく沢水が流れています。この流れはやがて山麓に達し、西山川の他に何本もの水路を通じて上堰潟へ流入していました。図 1 には 1948 年当時の空中写真から読み取ることのできる西山川の河道のほかに主な水路を示しました。

このように、上堰潟低地は年中豊富に水が供給される環境にあります。なかでも雪どけと重なる 3～5 月は

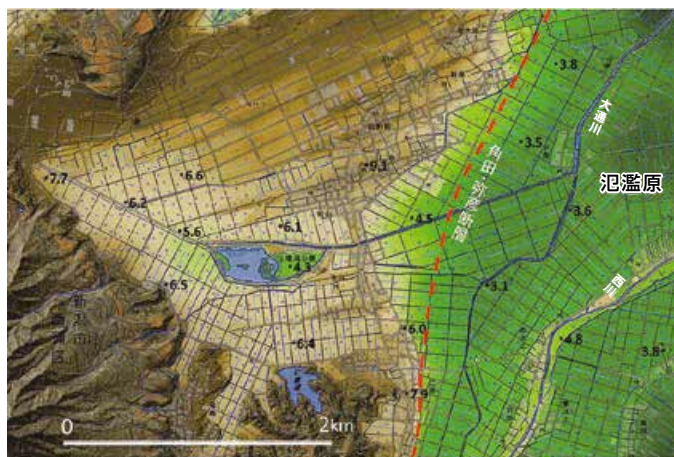
特に水量が多かったことが、後述する上堰潟の湛水範囲からもわかります。

## ■ 上堰潟低地の地盤高度

上堰潟低地は、大通川や西川の流れる図 2 の東半部の氾濫原に比べて地盤の高さが 3m 前後高くなっています。これはどのような理由によるのでしょうか。

同図の中央部に赤色で示した破線は角田・弥彦断層と呼ばれる、新潟市西区の内野上新町から長岡市寺泊夏戸付近まで延びる長さ約 21km の活断層です。このうち内野上新町から竹野町までは断層を挟んで上堰潟の位置する西側が、相対的に上昇する動きを示すことがわかっています。上堰潟低地の地盤が東側の氾濫原に比べて高くなっているのはこの断層の活動によるものと考えられます。

なお、角田・弥彦断層は後述する仁箇堤を抱く峰岡丘陵の形成にも大きく関わります。



地盤標高 (m) 1.0 2.0 3.0 4.0 5.0 6.0 7.0 8.0 9.0 10.0以上

図 2 上堰潟周辺地域の地盤標高

## ■ 峰岡丘陵と仁箇堤

上堰潟の南方 1 km ほどの所から南側一帯には峰岡丘陵と呼ばれ、柿畑に広く利用されている標高 30 ~ 50 m 弱の台地状の地形が存在します。仁箇堤はこの丘陵を南北方向に刻む谷の出口をせき止めて造られた面積約 5.6ha ほどの人造湖です (写真3)。



写真3 峰岡丘陵と仁箇堤

## ■ 峰岡丘陵の地形

峰岡丘陵の地形は、図3に示したように、複雑に入り込んだ複数の谷と、その谷を隔てる稜線、そして丘陵南半部に広がる平坦面(F)によって特徴づけられます(写真4)。この稜線と平坦面は地形的にどのような関係にあるのでしょうか。



写真4 平坦面 (手前) とそれに続く稜線 (奥)

## ■ 峰岡丘陵の生い立ち

ここでは仁箇堤の水を涵養する峰岡丘陵の生い立ちと地形についてみてみます。峰岡丘陵の地質学的研究<sup>1)</sup>によれば、のちに峰岡丘陵となる一帯は、今から 14.5 (± 4.0) 万年前に前述した角田・弥彦断層の活動に伴ってブロック状に隆起し始めました。その後、2回の海面上昇によってこの一帯には浅海が広がり、古信濃川から運搬された三角州性の堆積物(砂礫)に覆われました。

こうした経過を経ながら角田・弥彦断層の継続的な活動に伴って峰岡丘陵一帯はさらに隆起し、現在の高さに至ったと考えられています。

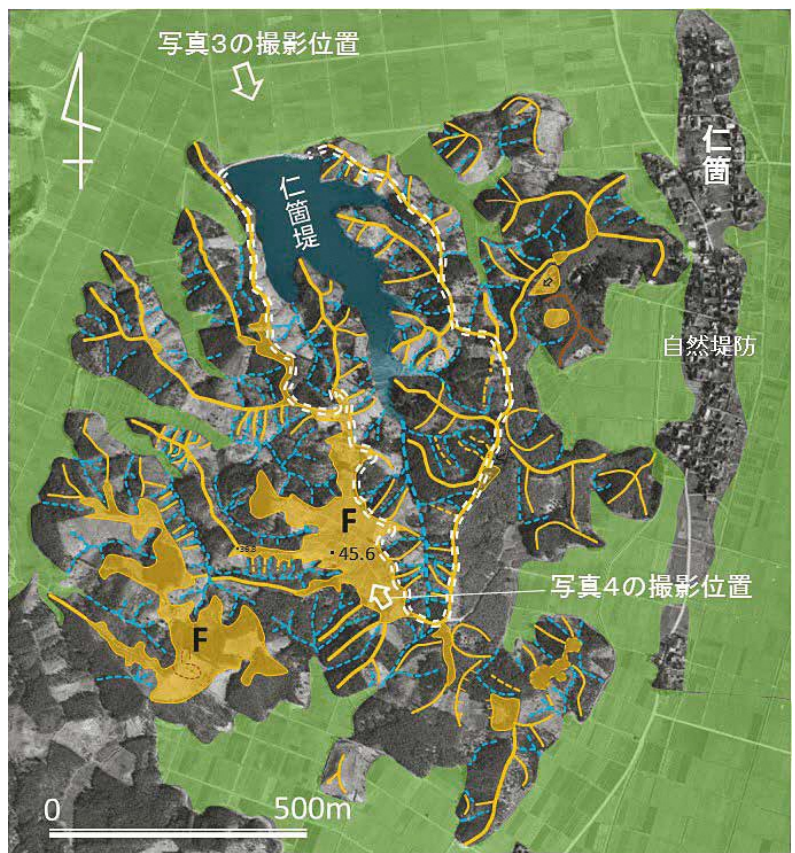


図3 峰岡丘陵の地形 (尾根と水系分布)

前述したように、峰岡丘陵は今から14.5 (± 4.0) 万年前から隆起が始まりますが、その表面は三角州性の堆積物に覆われていることから、最初はほぼ平坦だったとみられます。しかし、隆起の進行とともに平坦だった土地に次第に谷が深く発達していったと考えられます<sup>2)</sup>。このことは、現在は谷となっている所にもかつては平坦面が広がっていたことを示唆します。

図4は時間の経過に伴って地形がどのように変化するかを模式的に示したものです。最初は(1)のように平坦面が広がっていますが、その後谷が発達して平坦面が縮小します(2)。この段階では谷の占める面積はそれほど大きなものではありません。(3)の段階になると平坦面はほぼ消失し、谷と谷が狭い稜線で隔てられた地形となります。このようにみると、峰岡丘陵を特徴づける谷と稜線は(3)の段階、一方、南半部に広がる平坦面は(2)の段階にある地形と考えられます。また全体としてみると、峰岡丘陵は(2)から(3)への移行段階にある地形と捉えられます。さらに時間が経過すれば四方から谷が食い込んできて、自然の状態ではやがて平坦面は消失し丘陵全体が(3)の段階に至ります。

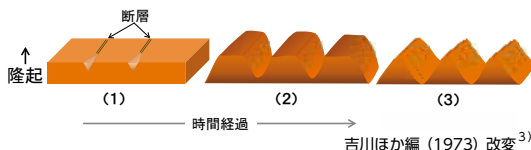


図4 平坦面からの地形変化

## 仁箇堤の水

図3に示した丘陵の範囲からみると、仁箇堤はかなり大きくみえます。ここにこれだけ大量の水が溜まるのはなぜでしょうか。

その理由は背後の谷(集水域)の面積にあるとみられます。仁箇堤に水を供給する谷は図3の白い破線で示したように、他の谷に比べて格段に大きく、それに伴って左右の斜面

から派生する小谷(一次水系)の本数も、他の谷に比較してかなり多いことがわかります。このことは仁箇堤への水の供給量が他の谷よりも多いことを意味します。

仁箇堤がここに造られ、長年にわたって変わらず、現在も豊富に水を湛えているのはこうした理由からだと考えられます。

- 1) 新潟平野西縁団体研究グループ(2017): 越後平野西縁断層帯域 峰岡丘陵の地質構造発達史―孤立丘陵―・活断層帯の形成過程―。地球科学, 71-3, 135~151.
- 2) 現在みられる深い谷は、ブロック状の隆起に際して生じた断層に沿って形成されたと考えられています。
- 3) 吉川虎雄ほか(1973): 『新編 日本地形論』東京大学出版会, 415p.

## コラム 仁箇堤の「サカウチ猟」

「サカウチ猟」とは、かつて仁箇堤で行われていたおもにカモを獲る猟のことです。

この猟には、サカウチ網と呼ばれる長さ4mほどのY字の形の猟具が用いられました。網は上部のV状の部分に張られており、その網でカモを捕獲します。

カモは夕刻に餌を食べに堤から飛び立ち、また夜明け前に堤に戻ってきます。その習性を利用して低く飛んでくるカモをめがけてサカウチ網を真上に投げ上げます。カモが網に当たればそのまま網とともに落下します。しかし、熟練は容易ではなかったといえます。

仁箇堤では、網を投げ上げるやぐらは堤の両側の稜線近くにありましたが、今となってはその正確な場所はわかりません。サカウチ猟は、かつては日本各地で行われていたよ

うですが、現在は石川県の片野鴨池などに残るのみとなっています。

(澤口晋一・齋藤一雄)



サカウチ猟の様子  
(石川与五栄門氏撮影)

サカウチ猟については以下の書籍に詳しい記述があります。

金塚友之丞(1970) 『蒲原の民俗』  
―新潟県民俗学会叢書―  
野島出版, 323p.

# 上堰潟の今昔 —土地改良事業以前と以後—

【澤口晋一・齋藤一雄】

## ■ 土地改良事業以前の上堰潟

1960年前後に実施された土地改良事業以前には、上堰潟は季節によって湛水域の広さが大きく変動していました。写真1は1949年5月10日に撮影された空中写真です。

前章で述べたように、この時期は角田山からの雪どけ水が山麓部に流れ込むため、低地一帯が広く湛水している状態がよくわかります。その面積は120～130haにも及んでいます。現在の上堰潟の面積が11haですから11～12倍もの広さです<sup>1)</sup>。湛水部分の水深は30～50cmあったため、当時の土地区画のパターンは水没して全く写っていません。現在の上堰潟から想像することは難しいのですが、春には季節限定で大きな潟が出現していたのです。

写真2は石川与五郎門氏が田植えの時期に撮影した写真<sup>2)</sup>です。本来の上堰潟の範

囲をはるかに超えた範囲が湛水している様子が鮮明に写っています。

## ■ 土地改良事業以後の上堰潟

土地改良事業によって上堰潟低地は、新たに方形に土地区画がなされました。写真3にその様子が写っています。この時点では、西山川の水が直接上堰潟に流れ込んでいます。しかしこの事業以降、用水・排水路網が整備され、上堰潟の灌漑用水源とし



写真2 稲を積んで来た舟



写真1 土地改良以前の湛水範囲と現在の上堰潟



ての機能は必要なくなりました。

さらに、1970年代から1980年代初めには、潟の北側を迂回するように西山川の河道がつけ替えられました。これによって、上堰潟には自然に流入する河水がなくなってしまい、潟全体が完全に陸化し、原っぱのような状態となりました。写真4にはその様子が写っています。

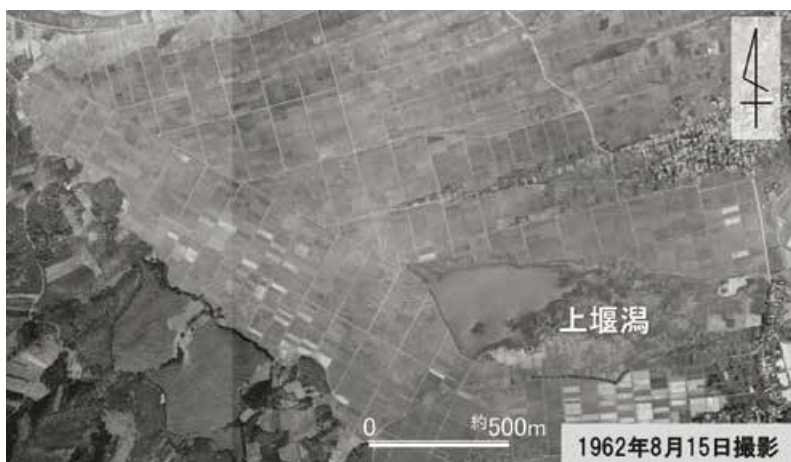
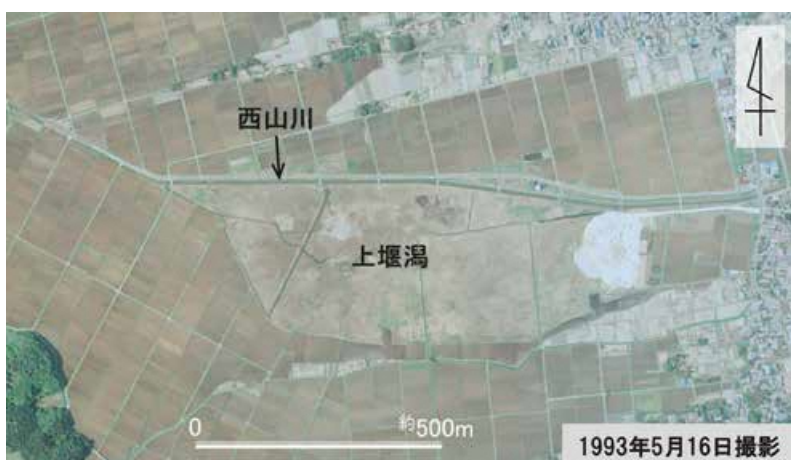


写真3 土地区画整理後の上堰潟低地



西山川の河道が干上がった上堰潟の北側に付け替えられている。

写真4 乾陸化した上堰潟

それでは、上堰潟はいつどのような目的で、現在のように水を湛える潟となったのでしょうか。

### ■ 洪水調整池としての上堰潟

西山川は毎秒  $10\text{m}^3$  の流下容量しかもない小河川です。上堰潟はその西山川が洪水となった際に水を溜める調整池として1993年から1999年にかけて整備されました<sup>3)</sup>。つまり上堰潟は洪水調整のために復元された人工の潟なのです。造成にあたっては貯水量を増やすために元の湖底を3mほど掘り下げています。またこの事業と並行して公園整備も行われました<sup>4)</sup>。多くの人が散策を楽しむ遊歩道は、堤防の機能を併せもっています(図1)。

### ■ 上堰潟をめぐる水路

上堰潟には遊歩道と並行して水路が掘られています。その水路と流れの方向を図2に示しました。角田山の湧水や周辺の水田の排水を集めて流れる西山川の水は、ふだんは洪水調整堰の手前から、上堰潟の北側を迂回する本流に流していますが、増水時には過剰な水を堰から上堰潟に流入させます(写真5、6)。水はさらに、潟の南側に掘られた素掘りの水路からも調整堰側に供給されます(図



「上堰潟の歴史」より

断面の位置(イ、口)は図2参照

図1 上堰潟の横断面図



図2 上堰潟をめぐる水路

2)。また、潟の南方から流入する水路 a(稲島下江) は、角田山に発し稲島を経由してくる流れです。この水路の水は唯一年間を通じて上堰潟に供給されます。

一方、潟の水は、bの放水路から西山川に排水されます。この流れを休憩所脇の橋の上から眺めると、自然の溪流のようで見事です。



写真5 洪水調整堰付近からみた上堰潟



写真6 洪水調整堰とその周辺

- 1) 鳥屋野潟の面積約 158ha, 佐潟の面積約 44ha.
- 2) 斉藤文夫編 (2013) : 『蒲原 昭和の記憶—カメラが捉えた昭和の残像—』 254p.
- 3) 都市周辺河川機能緊急整備事業 (1993 ~ 1996 年)
- 4) ふるさとづくり河川事業 (1993 ~ 1997 年)

## ■ 生物をはぐくむ水路

前章で述べたように、上堰潟周辺の水田の中に造られた水路には鋼矢板やコンクリートで固められていない素掘りのものが多くあります。こうした水路の両岸は草に覆われ緩いスロープとなっており、自然の小川に近い状態が維持されています。

上記の水路 a(写真7)の水は高い透明度を保ったまま上堰潟に流入します。また、土地区画以前の自然な屈曲を残したままの流れ(図2c、写真8)も見ることができます。このような自然に近い状態の水辺は様々な生物の生息の場となっています。遊歩道を少し外れて田んぼのあぜ道を歩いてみることをお勧めします。

上堰潟は人工的に再生されましたが、20年以上の歳月をへて、潟には自然な雰囲気 が漂い、多様な生物の生息できる環境が戻ってきています。上堰潟は、全国でも特筆すべき自然再生の例といえます。

上堰潟は人工的に再生されましたが、20年以上の歳月をへて、潟には自然な雰囲気が漂い、多様な生物の生息できる環境が戻ってきています。上堰潟は、全国でも特筆すべき自然再生の例といえます。



写真7 角田山からの水が流れる素掘りの水路



写真8 自然な屈曲を残した水路

# 上堰瀉低地とつながる角田山

【澤口晋一】

## ■ 角田山東面の森林と環境

上堰瀉公園を散策すると角田山が間近に迫ってくるようです。角田山と上堰瀉低地との間には遮るものが何もなく、両者そのまま続いています。このことが上堰瀉を含めたこの低地の環境に大きな影響を与えていると考えられます。

写真1は上堰瀉付近上空からみた角田山です。山麓～中腹の緩斜面は柿畑となつていますが、これより高い位置の斜面上は広く森林に覆われているのがわかります。濃い緑はスギの植林地、薄茶色に見えるのが落葉広葉樹林です。植生図(図1)をみると、角田山の南半部～東面にかけてはスギ植林地が広い面積を占めていますが、山頂周辺から北側ではかつて薪炭として利用されていたコナラ、ミズナラをはじめ、マルバマンサク、ツツジといった樹木によって構成される落葉広葉樹林が分布しています。春先に私たちの目を楽しませてくれるカタクリや雪割草などの可憐な山野草の多くはこの樹林下に生育しています。

これらの森林は環境省による植生自然度<sup>1)</sup>で10段階評価の6～8に相当することから、角田山の自然度はかなり高いといえます(図1)。さらに、前章で述べたように角田山東面

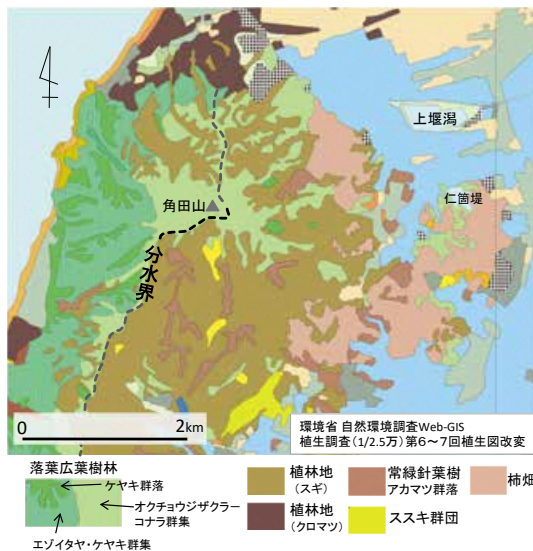


図1 角田山の植生図

には、森林に覆われた谷頭に水源をもつ沢が何本も存在し、今も年中枯れることなく透明な水を上堰瀉低地に供給しています。

1976年に角田山とその周辺で実施された野生鳥類調査<sup>2)</sup>では、16目34科120種もの鳥類が観察されています。こうした多様な鳥類がみられるのも、角田山が生物の生息・生育の場として好適な環境を備えているためといえます。

このように、角田山の存在が上堰瀉とその周辺の生態系を形作るうえでも極めて重要な役割を担っていると考えられます。次章以降では、この低地の豊かな生態系を示す例を紹介します。



写真1 角田山東面の景観と上堰瀉低地

2021年11月17日撮影

- 1) 環境省自然環境局 生物多様性センター(2016):1/2.5万植生図を基にした植生自然度について。
- 2) 巻町・瀉東村教育委員会(1976):『角田山の自然』角田山山塊自然総合調査報告書, 372p.

# 上堰潟で暮らす生きものたち

【佐藤安男・井上信夫】

## ■ 多様な環境に暮らす生きものたち

角田山、峰岡丘陵からの流水が上堰潟低地の水田地帯をめぐり、様々な水辺の生きものをはぐくみます。浜堤は畑地や竹やぶとなり、キツネやタヌキなどの動物たちの移動経路となっています。潟周辺は、新潟市内でも特に積雪が少なく、ハクチョウやガンカモ類、サギ類の餌場としても利用されており、トキやコウノトリが訪れることもあります。



採餌するダイサギ・アオサギ・オオハクチョウ・トキ

## ■ 上堰潟は日本有数のハクチョウ飛来地

近隣のラムサール条約湿地の佐潟には近年 5,000 羽のハクチョウが飛来します。上堰潟でも 1,000 羽を数えるようになり、日本有数のハクチョウ飛来地になりました。

安心できるねぐらの上堰潟と良好な採食地の田んぼの組み合わせがハクチョウだけでなくガンカモ類もたくさん呼び寄せられるようです。



朝の飛び立ち前の光景

## ■ 園路や木道から観察できる自然

春は菜の花畑、秋はコスモスの花が人気の上堰潟公園。木々の間を歩く園路や水辺のデッキからはカモやサギの仲間を、また水辺を渡る木道からは甲羅干しするカメ類や潜水するカイツブリ、美しいカワセミも観察できます。冬期間は菜の花畑に大挙して上陸し、若葉をついばむオオバンやヒドリガモを目にすることがあります。



クサガメの甲羅干し



菜の花畑に上がってきたオオバン・ヒドリガモ。人が近づくとそそくさと潟に戻っていく



エチゴモグラ

## ■ 園内に並ぶ不思議な土の小山

公園内や周辺の農地には、たくさんのモグラ塚が見られます。作ったのは日本最大のモグラであるエチゴモグラで、世界でただ 1 か所、越後平野中心部だけに住む希少な固有種です。角田山麓や海岸松林には、東日本に広く分布するアズマモグラが、エチゴモグラを包囲するように住んでいます。

写真提供：鈴木与志春（トキ）

# 上堰潟と周辺の鳥類

【佐藤安男】

上堰潟は、野鳥の池として広がる水辺環境と、公園内にある樹木により様々な野鳥を見ることができます。近隣には角田山や峰岡丘陵があり、そこに生息する野鳥も訪れます。また、周辺の水田では、草地や湿地環境を好

む鳥類が見られますが、冬季は、福島潟周辺などで積雪が多い時にも上堰潟周辺は積雪が少なく餌を取ることができるため、ハクチョウやガン類が多く集まることがあります。



**オオタカ** (留鳥)  
カラス大の猛禽類で、ハトやカモを捕まえて食べる。



**チョウゲンボウ** (留鳥)  
ハヤブサの仲間。ホバリングし上空からネズミを狙う。



**シジュウカラ** (留鳥)  
スズメ大の身近な鳥。樹上で昆虫や木の実を食べる。



**コゲラ** (留鳥)  
スズメ大の小型のキツツキ。昆虫の他木の実も食べる。



**カルガモ** (留鳥)  
水辺近くで繁殖。オスもメスも同じ模様で地味な羽色。



**オオバン** (留鳥)  
黒い羽色に白い額とくちばし。水草や小魚を食べる。



**カイツブリ** (留鳥)  
潜水して小魚やエビを食べる。水草で巣をつくる。



**カンムリカイツブリ** (留鳥)  
大型のカイツブリの仲間。長く潜水し魚を食べる。



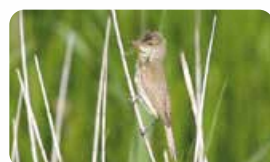
**ダイサギ** (留鳥)  
大型の白いサギ。主に浅瀬を歩き魚をつかまえて食べる。



**カワウ** (留鳥)  
大型で黒い羽色。潜水して魚を捕え水面に出て飲み込む。



**カワセミ** (留鳥)  
水辺の宝石ともいわれる。水中に飛び込み小魚を捕る。



**オオヨシキリ** (夏鳥)  
ヨシ原で巣をつくり、オスは目立つ場所で鳴く。



**マガモ** (冬鳥)  
飛来数の多いカモ。オスは派手、メスは地味な羽色。



**コガモ** (冬鳥)  
池や川に数多くいる小型のカモ。秋早い時期に飛来。



**オオヒシクイ** (冬鳥) (奥)  
日本に飛来する最大のガンで全体的に茶色。警戒心が強い。



**ミコアイサ** (冬鳥)  
オスは白地に黒い模様があり、パンダガモと呼ばれて人気。



**タシギ** (冬鳥)  
田んぼで目立たない羽色。長いくちばしで土中の餌をとる。

**コハクチョウ** (冬鳥) (左側手前)  
主に潟をねぐらとして、田んぼを餌場にする大型の水鳥。

**ハクガン** (冬鳥) (右側手前5羽)  
日本に飛来する希少なガン。小型のガンで白い羽色が特徴的。

# 上堰瀉と周辺河川の水生動物

【井上信夫】

上堰瀉は数多くの水路を通じて周辺の水田地帯とつながり、西山川から広通川、新川を通じて日本海とも直接つながっています。水生動物は一度干拓によって消滅しましたが、遊水池として復元され、周辺河川からやってきた種類が生息しています。

現在、瀉の中と周辺河川から、19種類の魚類、十数種類の貝類、甲殻類が確認されていますが、魚類の多くは外来魚です。秋になると西山川までサケが遡上することがありますが、産卵に適した環境ではないため、繁殖は難しいと思われます。



**コイ** (飼育型)

西アジア原産で、飼育しやすい。野生型は琵琶湖などにしかない。



**ギンブナ** (マブナ)

水生の小動物を捕食。ほとんどが三倍体のメスでオスは稀。



**タイリクバラタナゴ**

アジア大陸原産。生活力旺盛で在来タナゴの脅威。



**ニゴイ** (地方名: ミゴイ)

50～60cmに成長。コイに似るが細長く口が尖る。



**オイカワ** (地方名: ジンケン)

琵琶湖原産。鱗に光沢があり、オスは鮮やかな婚姻色。



**モツゴ**: 西日本原産

体は細く、体側の縦条が目立つ。口先は上向きで尖る。



**タモロコ**: 西日本原産?

モツゴに似るが、口先は丸みを帯びてヒゲがある。



**ツチフキ**: 西日本原産

水底で暮らし砂泥中の小動物を捕食。平野部に定着。



**サケ** (シロザケ)

秋に広通川、西山川まで迷入してくるが数は少ない。



**キタノメダカ** (メスとオス)

水面に群れをなし、落下した小昆虫などを捕食。



**トウヨシノボリ**

ハゼの仲間で、成熟したオスは尾柄部に橙色の斑。



**ブルーギル**

北米原産の特定外来生物。稚魚や卵、水生昆虫や水草を捕食。



**オオクチバス** (ブラックバス)

北米原産の特定外来生物。様々な水生動物を捕食。



**カムルチー** (ライギョ)

アジア大陸原産で、食用に導入。魚やカエルを捕食。



**タニシ 2 種**

右大)オオタニシ、左小)ヒメタニシ: コンクリート水路にも生息。



**イシガイ科 3 種**

左から)ヌマガイ・キタノタガイ・イシガイ。カラスガイも生息。



**マシジミ** (大: 在来種)・**タイワンシジミ** (小: 外来種)  
マシジミはほぼ絶滅。



**カワリヌマエビ類**: (上) 中国原産で大繁殖中。**スジエビ**: (下) 体側の黒線が特徴。



**アメリカザリガニ**

北米原産の侵略的外来種。様々な水生動物や水草を食べる。



**オオマリコケムシ**: 北米原産

1.5mmほどの個虫が群体を形成する寒天質の塊。

引用: 井上信夫 (2016) 上堰瀉の魚類相調査報告  
【平成 27 年度 新潟市潟環境研究所 研究成果報告書】45～60. 新潟市

# 上堰潟の水辺と農地の動物

【井上信夫】

上堰潟の水辺や周辺農地には、野鳥やトンボ類が飛び交っていますが、ほかにも様々な動物が住んでいます。両生類のカエル類や爬虫類のカメ類などは、比較的見つけやすいですが、哺乳類は簡単に発見することは困難です。しかし、

大勢の人々を通る園路のわきや農地には、越後平野固有のエチゴモグラが住み、ハタネズミが坑道を作って住んでいます。周辺水路の泥上や畑では、イタチやタヌキ、キツネ、ノウサギなどの足跡を見ることができます。



**ウチワヤンマ**：8cm  
水辺に住む大型のサナエトンボ。尾の先端がうちわ状。



**ショウジョウトンボ**：5cm  
胸部が太め。成熟オスは真っ赤で目立つ水辺のトンボ。



**コシアキトンボ**：4～5cm  
水辺で暮らす黒い体のトンボ。白色の腰が特徴的。



**チョウトンボ**：3～4cm  
水草が繁る池の上を、幅広い黒い翅でヒラヒラ飛ぶ。



**ギンヤンマ**：7～8cm  
オスは水色の腹部が鮮やか。池の上をパトロール飛行。



**ニホンアマガエル**  
池や草地など様々な環境に住む。小さな吸盤をもつ。



**シュレーゲルアオガエル**  
草木の上に住む吸盤が発達した在来種のカエル。



**トノサマガエル** (メス)  
在来カエルの中では大型。角田山麓に住むが激減。



**ウシガエル** (食用ガエル)  
北米原産の特定外来生物。水辺の様々な動物を捕食。



**クサガメ**  
県内では昭和以降に増加。背面の3本の稜線、首の黄色い線が特徴。



**ミシシippアカミミガメ**  
北米原産で頭部の赤斑が特徴。幼体はミドリガメ。



**ニホンスッポン**  
甲羅は柔らかく、泳ぎが巧み。食用に持ち込まれた。



**シマヘビ**：長さ1～1.5m  
背面の縞模様は不鮮明なものも。様々な環境に適応。



**エチゴモグラ**：16～18cm  
越後平野中心に孤立分布する日本最大のモグラ。



**ハタネズミ**：10～12cm  
地中生活に適応して耳介は小さく、尾は短い。



**ニホンノウサギ**：45～55cm  
農地の縁や海岸の松林、角田山に住む。冬は白化。



**ニホンイタチ**：オスは大型30cm  
水辺を好み潜水が得意。魚やカエル、ネズミや鳥類を捕食。



**ホンドタヌキ**：50～60cm  
雑食性の中型哺乳類。農地周辺に多数住んでいる。



**ホンドギツネ**：60～70cm  
イヌ科の肉食獣。ネズミ類やウサギなどを狩る。



**ニホンイノシシ**：1～1.7m  
数年前から増加中。周辺農地にも出現。

写真提供：齋藤一雄 (ニホンイノシシ)

# 上堰瀧周辺の街道と史跡

【太田和宏】

## ほっこくかいどう ほくりくどう ■ 北国街道 (北陸道)

江戸時代の街道の中でも北国街道は、越後国の背骨ともいえる重要な街道でした。北国街道の経路は江戸時代にも変化しますが、江戸時代中期には、弥彦、岩室、稲島、布目、赤塚、四ツ郷屋、五十嵐浜等を経て新潟へ続く経路でした(写真1)。1873(明治6)年に北陸道が一等道路に指定され、稲島を通らず、弥彦、岩室、竹野町、布目、赤塚、内野等を経て新潟へ続く経路となりました。

上堰瀧周辺の地区には、北国街道(北陸道)にゆかりのある史跡があります。その中から主なものを以下に紹介します。

※ 1873(明治6)年「河港道路修築規則」布達で、新潟県では、一等道路は北陸道、二等道路は三国道・岩代道・羽前道、三等道路は一等と二等を接続する道とされました。



図 上堰瀧周辺の街道および史跡



写真1 旧街道と角田山(布目-稲島間)

## ■ 布目の石仏群

### ● 庚申塔

布目と稲島の区間は、旧街道の風情を残しています。布目の集落を過ぎた道端に石仏群があり、その中に庚申塔(写真2)と馬頭観音(写真3)があります。庚申塔は庚申信仰によるもので、60日に1回ある庚申の日は寝ずに夜を明かす集まりを行い、それを3年18回続けた記念に建立されることが多いようです。庚申塔は各地に数多く残っています。



写真2 庚申塔(手前)と馬頭観音像(中央奥)



写真3 馬頭観音像

### ● 馬頭観音像

六観音菩薩のうち、唯一、馬頭観音だけが目尻を吊り上げた憤怒の顔をしています。本像の顔は三面あり、頭上に馬頭をいただき、腕は八つ(八臂)あり、総髪は逆立っています。馬頭観音は人々の苦しみや悩みを食べ尽くすとされ、六道の一つ「畜生道」を救済するといわれています。また、民間信仰として、馬の無病息災・供養などの畜生類の救済のため、各地で馬頭観音が建立されています。胸元には馬頭観音の「馬口印」の印が結ばれているのを確認できます。



## ■ 長島古城とタテ

江戸時代後期に作製された絵図には、上堰潟の南岸に「長島古城」跡と、その城（館）の城主と思われる「吉江喜四郎 藤田能登守」の名前が見られます。また、1907（明治40）年に編纂された『新潟県西蒲原郡志』<sup>1)</sup>には「城主は長島佐太郎と



写真4 タテと地形との関係

云う者なりきという（年代詳ならず、或は黒鳥兵衛<sup>2)</sup>の為に滅ばされきという傳ふ）」とあり、赤塚へ逃れたという伝説もあります<sup>3)</sup>。

長島古城の位置は「タテ遺跡」と呼ばれ、中世のものとみられる円鏡や宋銭などの遺物の出土<sup>4)</sup>する場所とも一致します（図）。遺物の出土地は、地形的には浜堤②（3ページ図）に相当します（写真4）。なお、浜堤①と②の間は、約170×100mほどの広さで浜堤より一段低い平坦な土地となっており（盛土の可能性がありますが）、その西側先端部は約50×50mの広さで水田に突き出た形になっています。諏訪神社はその部分に置かれています。ここを長島佐太郎の砦跡とする説もあります<sup>3)</sup>。

◎長島佐太郎の子孫にあたる永島家（西区赤塚）には、1578年の「御館の乱」で長島佐太郎は上杉景虎方につき敗れたため、赤塚に逃れ、「長島」を「永島」と改姓したという伝えがあることが筆者の調査からわかりました。長島佐太郎が黒鳥兵衛に滅ばされたとする伝えには再考の余地があるようです。

## ■ その他の史跡

### ● 醫王山仙城院（松野尾地区）

越後四国札所第三十三番札所、越後薬師札所第十六番札所。境内には樹齢が200年を超えるスダジイ（写真5）のほか、良寛の漢詩・和歌の石碑があります。1950（昭和25）年、會津八一が五合庵まで良寛遺跡巡りを敢行した際にも立ち寄っています。

### ● 普門山萬福寺（仁箇地区）

曹洞宗の寺。1599（慶長4）年に開かれたと伝わっています。洞穴「洞穴出現観音大士」や良寛の石碑があります。9世悦巖素忻の高弟である宗龍は良寛の師の一人です。



写真5 仙城院のスダジイ

- 1) 小島太郎（1907）：『新潟県西蒲原郡志』新潟県西蒲原郡教育会（復刻版：2000年春秋社），332p.
- 2) 平安時代後期、越後国（新潟県）における伝説上の人物。越後国内で反乱を起こし、妖術を使って討伐軍に抵抗するも敗れて処刑された。西区黒鳥や緒立温泉など、黒鳥兵衛伝説ゆかりの地がある。
- 3) 斎藤順作（1971）：『村・家・人』巻町双書第16集，角田山周辺総合調査 民俗編の1，巻町役場，191p.
- 4) 奈良文化財研究所：文化財総覧 WebGIS

# 上堰潟のはなし

【高橋郁丸】

齋藤一雄さん（西蒲区松山，昭和20年生）のお話をもとにまとめました。

## ■ 水量の多かった春の上堰潟

昔は、上堰潟は3月末まで雪解け水で水量が多くて家の裏口で釣りをすることができほどだった。上堰潟から出ていく川が3本あったけれど、狭くて排水が間に合わなかった。水が引ききらないうちに田ぶちをして、5月末から6月初めに田植え。集落から田に行くためには舟に乗っていた。今の駐車場のあたりは集落の共有地で常に舟が置いてあった。子どもは遊び場になっている潟端まで勝手に舟に乗っていった。西風が吹いている時には降りて舟を放すとひとりでの元の場所に戻った。昔は鯉や鰻、鯰や雷魚がいた。蛙を釣り針につけて泳がせていると丸ごとバクツと食べた。鴨もいて、卵はゆでて食べた。手長海老も食べた。

## ■ 思い出深い夏の上堰潟

夏になると上堰潟の水が減るため藻払いといって水路を草刈りして田に水を引き込もうとした。昔は蓑笠を着て、雨乞に回ったという話だ。今は信濃川から水が来るが、昔は上堰潟しかなかったから神頼みしたのだろう。

上堰潟の近くに3つ池があった。村中の子どもが40人くらい出て池を泥混じりにガボガボかきまぜると中にいた魚が酸欠で浮いてくる。それを捕まえるのが子どもたちの楽しみだった。たくさん魚が浮いて箆で捕まえた。川の魚は夏は食べるものじゃないと言うが、味噌汁にして食べた。

秋、稲刈りをして稲を舟に乗せてハザ掛けをした。農道に800m続くハザ木（タモギ）があって、大事なものだったが日陰

になるということでみんな伐り倒されてしまった。

## ■ 原野となった上堰潟

上堰潟は一時原野になった。埋めたのではなくて自然排水で干上がった。干上がったけれど、そのころ減反政策が始まったって田圃としては使いませんということになった。樋曾の隧道を掘った時の残土もここに持ってきた。それで公園の駐車場ができた。このあたりは国有地だったが、駐車場は松山集落共有地だったのを町が買い上げた。原野化した上堰潟は夏になると虫が発生したので、春に枯れ草を焼却処分した。ところが煙がひどいということで巻の町から大苦情が来て焼けなくなった。すると藪はジャングルのようになって狸がでるやら兎が出るやら大騒ぎになった。自然が豊富だった。

## ■ 地元も驚く！大人気の上堰潟公園

草やぶで潟の痕跡も無くなり、駐車場もできて、平成9年上堰潟公園工事が着工した。わきを通る広通川の水面が低いので、今の潟は2～3mも掘って水を溜めたものだ。人間が人工的に作りあげて掘って水を溜めて作ったんだ。今は公園が大人気で車の渋滞で大騒ぎだ。人気スポットが近場にあることで集落としては困ることもある。田で作業するので農道に車を停めていると農道に入ってきて「どけ」と言うお客がいて騒ぎになる。4月の桜、菜の花、夏の向日葵、秋のコスモスなどテレビや新聞に出ると翌日や週末に大混雑で、それが悩みの種だ。



## ■ しょうじ川の女 伝説

齋藤一雄さんの祖母がよく語ってくれたという話がある。昔あった上堰潟の3本の川の一つ、しょうじ川の妖怪の話だ<sup>1)</sup>。

齋藤ハルさん (西蒲区松山, 明治33年生)



画:高橋郁丸

あったげろ。しょうじ川の岸で洗濯するきれいな女がいました。ある兄にやが、その女を見初めて嫁にしました。

女はおよしといました。身ごもって産気づいたおよしが産婆に「私の寝間を全部ふさいでください」と頼みました。産婆は変な話だと思いましたが、言うとおりにしました。兄にやの親が不思議に思って寝間をのぞくと、子を産んだおよしは、なんと大蛇となって炎を吹き上げていました。

正体を見られたおよしは「私はしょうじ川の大蛇。この子が可愛いくて仕方ないけれど、私は川へ戻ります。今までお世話になりました。乳の代わりに目を片方やるので、この子の口に入れおいて。もしたくさん泣いたら川へ来て、私を呼べば乳を吞ませます」と言って家を出ていきました。

あきらめきれない兄にやも、川でその正体を見てやっぱり大蛇であったかと、別れる覚悟をしました。およしは子どものためにもう一方の目も与えてしまったので目が見えなく

なり、時間を知るために鐘を鳴らしてほしいと頼みました。およしは「この子の身の上は私が引き受けるから、がまんして育ててください」と言って川に消えていきました。その子は器用で賢い子に育ったといひます。いちがぶらんともげた。

## ■ 上堰潟の雨乞行事 雨乞

信濃川から取水する以前、農作業は上堰潟の水が頼りで渇水時は雨乞をしていた。

松山ではワラの大蛇をつくり、車に乗せてお神酒を供え、神社で祈願をしてから全村民が蓑笠姿となり、ホラ貝を吹いたり太鼓や鉦を打って全耕地を練り歩いた。効験がないと何度も何度も耕地をまわり、最後はワラの大蛇を上堰潟に流したという。その後、ワラの大蛇をやめ、寺の不動様を荷車に乗せて引き回し、道端の人は「お祝いだ」「お祝いだ」と言いながら桶の水をまいたりしたが、次第に行われなくなり、戸隠山へ代参、水をもらってきて神主から雨乞いの祭りをしてもらうようになったという<sup>2)</sup>。

松野尾では仙城院に集まり、麦柄や菜種柄などで長さ四、五間の大蛇(龍)を作り、本堂の中に安置して僧から雨乞いの祈祷してもらう。若い衆が大蛇を担いで、法螺貝や太鼓の鳴り物入りで村を練り歩いて上堰潟まで行き、水に入って大蛇を潟の中心まで押し流した。やがて大蛇は雲を呼び雨を降らせたとされている<sup>2)</sup>。

また、松山では村で一番酒飲みの男に酒を飲ませて荷車に乗せて不動様を抱かせ、その後から太鼓やホラ貝で村中を練り歩いた。家々では天水桶やバケツに水を用意しておき、荷車が来たらその男に酒を飲ませ、用意しておいた水を不動様にざぶりとかけたという<sup>3)</sup>。

- 1) 伊藤太郎編 (1973):『犬に呑まれた嫁: 卷町の民話』卷町双書第19集, 角田山周辺総合調査 民俗編の2, 卷町役場, 264p.
- 2) 大竹信雄 (1992): 寺と行事と講『卷町史 資料編6 民俗』卷町, 655~656.
- 3) 渡辺秀英 (1967):『館柳湾』卷町双書第16集, 卷町役場, 150p.

# 松野尾小学校の取り組み

【松野尾小学校 鈴木綾子】

上堰潟公園は、学校にとって豊かな体験や学びの場です。低学年では生活科の学習で、花見やどんぐり拾い、雪遊びなど季節を味わう場として活用しています。遊具を使って体を思いっきり動かす場にもなっています。その体験を活かし、3年生では「上堰潟博士になろう」という学習を行います。低学年での体験を掘り起こしながら、「誰がつくったのか」「いつできたのか」など、子どもたちは疑問を見つけます。それが「見に行こう」「教えてもらおう」「やってみよう」など、次への興味意欲へと広がります。今年も実際に、上堰潟を育てる会、松野尾コミュニティ協議会、西蒲区産業観光課などたくさんの方から、公園の施設や植物の様子を教えてもらったり、田舟やわらアートなど上堰潟ならではの体験をさせてもらったりして、その方たちの地域への思いを伝えていただきました。子どもたちはその思いを受け止め、「伝えたい」とさらに学習を進めています。上堰潟は、子どもたちにとっての宝です。



松野尾小学校3年生の田舟体験の絵画

## 代表者のことば

新潟市里潟研究ネットワーク会議座長 新潟国際情報大学教授 澤口晋一

越後平野にはかつて数えきれないほどの潟があり、人は潟と一体となった暮らしを営んでいました。しかし、それらの潟は高度経済成長期以降、干拓や埋め立てによって次々と姿を消していきました。そのような中であって、幸運にも新潟市内には現在も16の潟が残っています。新潟市里潟研究ネットワーク会議は、この市内に残る16の潟を新潟市の宝と捉え、その魅力と価値を掘り起こし、賢明な利用、保全について考えることを目的とした組織です。

こうした活動の一環として、本ネットワーク会議では、新潟市内16の潟についてガイドブックの作成を進めています。本ガイドブックは、北区の「十二潟」（2020年）、東区の「じゅんさい池」（2021年）に続く3冊目のガイドブックです。

潟や湿地の賢明な利用、保全はラムサール条約の支柱でもあり、SDGs（持続可能な開発目標）の達成にも重要な役割を担うものです。

新潟市にとってかけがえのない存在である潟への理解と愛着を、本ガイドブックのシリーズを通じて深めていただければ幸いです。

上堰潟・仁箇堤に関する詳しい情報や過去に発行したガイドブックは「潟のデジタル博物館」をご覧ください。



◆制作：新潟市・新潟市里潟研究ネットワーク会議 ◆協力：上堰潟公園を育てる会

◆地域が主役里潟保全事業 上堰潟ガイドブック執筆者 ※敬称略

新潟国際情報大学 国際学部教授 澤口 晋一  
赤塚中学校地域教育コーディネーター 太田 和宏  
上堰潟公園を育てる会 代表 齋藤 一雄  
新潟県民俗学會理事 高橋 郁丸

生物多様性保全ネットワーク新潟 事務局 井上 信夫  
水の駅「ビュー福島潟」事務局長 佐藤 安男  
新潟市水族館マリンピア日本海 副館長 大和 淳

◆表紙写真：上堰潟（空撮）、上堰潟の菜の花、田舟体験の様子

2022（令和4）年3月発行  
2023（令和5）年3月改訂